

日本語教育のルーツをたどる

—ウェブサイトで学ぶ日本語教育史—

小川 誉子美 (横浜国立大学)
ogawa-yoshimi-tr@ynu.ac.jp

【要約】

近年、諸分野の歴史研究の中で、日本語教育に関する史実が明らかにされつつある。筆者は、こうした研究成果を取り入れながら日本語教育の歴史を俯瞰的に紹介し、当領域のさらなる発展を促すことを目的に、ウェブサイトを作成し、授業でこれを使用してきた。本論は、まず、このウェブサイトの概略を示し、次に、当サイトを利用した日本語教育のルーツをたどる授業において、日本語教育を専門としない受講生の学びの実態について紹介するものである。

1. 目的と背景

古代から日本と諸外国との間で数々の交渉が行われてきたが、その際、交渉言語はどのように選択されたのだろうか。通訳者はいつごろから養成されたのだろうか。十分に意思疎通ができたのだろうか。広く知られた日欧間の出来事に於いて、例えば、ポルトガルが種子島に鉄砲をもたらし、日本との交易交渉を行ったとき、幕末に来日した各国が日本と条約を締結したとき、開港後まもない時期にやってきた西洋人が開港地で商談を行ったときなど、交渉はどの言語で行われたのだろうか。また、対日戦を控えた国々の場合、例えば、日露戦争の際、日露双方に通訳者は何人ぐらいいたのだろうか、当時の通訳者の語学力はどれほどのレベルだったのだろうか。歴史の表舞台には登場しない通訳者の存在について、誰しもが疑問に思ったことがあるだろう。日本語を駆使し歴史を支えた人々や日本語研究の盛衰について、内外の様々な分野の歴史研究において興味深いエピソードが報告されている。

筆者は、中学や高校で習った誰もが知る日本の対外関係史の中で、このような知られざる側面に光を当て言語の問題に注目するという方法によって、日本語学習の歴史が身近に感じられるのではないかと考え、こうした疑問や関心を喚起させながら、日本語教育の歴史をひもとく醍醐味を伝えることを目的に、『ようこそ！日本語教育・学習史のホームページへ』¹を作成した。

かつては、新たな歴史資料を入手することが一仕事で、幸運にも所在が分かり、それが公的機関に所蔵されていても、目録を確認した上で、必要な資料の複写を依頼し手にするまで相当の労力を要した。しかし、昨今、各図書館において所蔵資料が一枚一枚画像化され、デジタルアーカイブとしてウェブ上で公開されるようになった。検索機能も充実しており、容易に必要なものが入手できる。発行年が古く劣化が激しくこれまで手にすることすらできなかった稀少本は、国立国会図書館デジタルコレクションのサイトで閲覧できるようになった。こうした環境の中で、日本語学習に関する新たな史実が数多く発表されるようになってきた。しかし、諸外国を含む他分野の研究者によって行われた研究も多く、その知見が日本語教育関係者の間で共有されていないという状況にある。さらに、日本語

¹ <http://ynu-isc-kokusai.jimdo.com/>

教育関連の学会や研究会の掲載論文や発表の題目を見ると、当分野に関するものは少なく、また、『新版日本語教育事典』（2005年、日本語教育学会編）の項目、日本語教員養成課程における「日本語教育史」という科目の開講状況を見ても、その位置づけは希薄であり、日本語教育に携わる者が先人の足跡に触れ、歴史から学ぶという機会がほとんどないことに気づかされるのである。学問によっては、学史にあたる科目が確立していたり、必修とし科目として扱っていたりする領域もある。学問を学ぶ際、歴史を学ぶ意義について、評論家の立花隆は、次のように言う。

「ぜひとも欠かせないのは、その学問の歴史、学説史、思想史である。一つの学問の世界に入っていくとき、まず何よりも必要なのは、その世界全体のパースペクティブを手早く頭の中に入れてしまうことである。（…）どの学問でも、壁にぶつかっていきづまると、もう一度“何を”と“どう”が問い直されることになる。そして、そのどちらか、あるいは両方のワク組が変更されて、学問は改めて発展する。これがたいていの学問の歴史である。その辺のところを一番よく教えてくれるのが、学問史、学説史である。」

日本語教育が学問として研究されるようになった歴史は浅く、日本語教育学史の研究は今後に期待されるであろう。「史」とつく領域は、例えば、経済学史と経済史、建築学史と建築史、日本語学史と日本語史などと区別される。前者の「学史」の記述もさることながら、後者にあたる日本語教育史を充実させ、歴史から学ぶ機会を提供することは、意義のあることではないだろうか。当ウェブサイトは、こうした状況への対応を念頭に作成したものである。

2. ウェブサイトの概略と授業での扱い

歴史の学習は、書物から知識を得ることは基本ではあるが、授業においては、受講生が自ら先行研究を読み解き、歴史資料を用いて自律的に取り組める仕組みを構築することが重要であると考え、本ウェブサイトでは、具体的な研究テーマや参考文献、歴史資料等の情報を中心に掲載した。当分野に関わる主な課題とともに、課題ごとに主要文献や資料の原本についての情報を提供する、いわば、日本語教育史を学ぶための課題と資料のリソースをめざすものである。特に、書籍や論文の情報提供だけでなく、歴史資料にウェブ上で触れる機会を提供することは、史実への関心を喚起し、研究への萌芽を育むことにもつながろう。

諸外国の研究者や学生への便宜をはかり、本サイトの主要部分である「課題と文献」は、英語版と中国語版を作成した。なお、1945年以前の史実に関しては、そのテーマを地域別に、日本国内、アジア、欧米その他の国々と分け、時代に関しては、近代以前と近代を区別し、次のようなタイトルのもと時代に沿って、それぞれ複数の課題を掲載している²。

- I 近代以前のアジアの人々
- II 近代日本と来日留学生
- III 近代日本とアジア
- IV 近代以前の日本とヨーロッパ
- V 近代の欧米・その他の国々
- VI 近代日本と来日西洋人

「文献」には、「課題」を遂行するのに必要な、書籍、論文、記事のほか、稀少本や一次資料が閲覧

² 2017年12月の時点で、最大17の課題を掲載している。

できるデジタルアーカイブも示している。ここに掲載したものは、基本文献の一部であり、受講生には独自に文献を探索することを強く推奨している。

3. コンテンツ「課題と文献」の紹介—ドイツに関連する課題

日本語教育連絡会議の記念すべき第30回目の会議がドイツで開催されたことにちなみ、本節では、ドイツやヨーロッパに関連する課題を中心に紹介する。

1) 19世紀～20世紀初頭：ベルリン大学東洋語学校の日本人講師

【課題】

ヨーロッパで開講された戦前の日本語講座には、現地の講師とともに、日本人講師も教壇に立つケースが多かった。日本人講師の数は、70名（延べ人数）をくだらない。中でも、ベルリン大学東洋語学校では、創設以来、ドイツ人とその言語の母語話者がペアで教えるというシステムであったため、初代日本人講師井上哲次郎以降、多くの留学生らがベルリン大学で日本語を教えた。当時の講義要目、教員調書などは大学の古文書館に保存され、講師の着任に関する記録は、日本の外交資料にも残されている。講師の中には、回想録を残した者もいる。当時の日本語講師の人物像や授業内容などについてまとめよ。

【文献】

- ・上村直己（1994）「ベルリン東洋語学校講師・辻高衡」『日独文化交流史研究』日本独学史学会
- ・小川誉子美（2010）『欧州における戦前の日本語講座—実態と背景—』風間書房
- ・Brochlos, Astrid（2002）“Das Seminar für orientalische Sprachen an der Berliner Universität und die japanbezogene Lehre”Japan und Preußen(=Monographien aus dem Deutschen Institut für Japanstudien der Philipp-Franz-Siebold-Stiftung, Bd. 32) Gerhard Krebs, Herausgeber
- ・Hartmann, Rudolf（1997）Japanische Studenten an der Berliner Universität 1870-1914, Mori-Ôgai-Gedenkstätte der Humboldt-Universität zu Berlin
- ・Hartmann, Rudolf（2003）Japanische Studenten an der Berliner Universität 1920-1945, Mori-Ôgai-Gedenkstätte der Humboldt-Universität zu Berlin

2) 日本語教師の提案：巖谷小波

【課題】

母語を外国語として教える経験は、日ごろ気づくことのない母語の特徴を発見する機会でもある。明治期の急速に近代化が推し進められる中、日本語にも新たな息吹を与えようとする提案や運動があったが、日本語教育の経験者がこれを推進したという例がある。新体詩運動をすすめた井上哲次郎も、日本語の表記法への提案を行った童話作家巖谷小波も、ベルリン大学東洋語学校で日本語を教えた経験があった。小波は、ドイツでの経験を『洋行土産』（上）（下）に記している。明治期の日本語事情を踏まえ、彼の提案内容やその後の経緯についてまとめよ。

【文献】

- ・巖谷小波（1903）『洋行土産』（上）（下）博文館
- ・巖谷大四（1974）『波の発音』新潮社

- ・川上眉山、巖谷小波(1968)『明治文學全集 20：川上眉山 巖谷小波集』筑摩書房
- ・桑原三郎編(1977)『日本児童文学体系 第一巻 巖谷小波集』ほるぷ出版
- ・佐久間重代(1968)「叔父・巖谷小波の思い出」『幼児の教育』 67(8)

3) ハンブルク植民研究所の初代日本学教授フローレンツ

【課題】

明治期、日本に滞在したお雇い外国人の中には、帰国後、大学で日本語や日本文学について教えた者がいる。東京帝国大学のドイツ語・ドイツ文学の講師を務めたカール・フローレンツは、1914年に開設されたハンブルク植民研究所でドイツではじめての日本学の正教授として、日本語・日本文学を教えた。彼は、20年に及ぶ滞日経験の中で、万葉集を研究し、東京帝国大学から博士号を授与され、日本の学者たちと交流をもった。なかでも、上田万年との「比較文学論争」(1895年)は、フローレンツが日本の短歌形式の原作を西洋の叙事詩の形式に翻訳したことを発端に展開された論争である。ハンブルク植民研究所に日本学正教授職が設置された経緯とフローレンツの功績についてまとめよ。

【文献】

- ・上村直己(1982)「カール・フローレンツの明治文学研究：付 K・フローレンツ文献目録」『熊本大学教養部紀要。外国語・外国文学編』17
- ・佐藤マサ子(1995)『カール・フローレンツの日本研究』春秋社
- ・辻 朋季(2009)「カール・フローレンツの初期日本研究をめぐって」『Rhodus : Zeitschrift für Germanistik』(25), 筑波ドイツ文学会

4) ドイツで作成された日本語教科書

【課題】

お雇い外国人の一人、ルドルフ・ランゲは、東京医学校(現在の東京大学医学部)でドイツ語を教えるかたわら、熱心に日本語を学んだ。帰国後、ベルリン大学で初代日本語講師を務め、日本語の教科書や辞書を作成した。同じころ、同僚のヘルマン・プラウトも日本語の教科書『日本語読本』を作成した。当時の作成された日本語教科書で紹介されているトピック、解説内容や会話文などを中心に教科書の特徴についてまとめよ。

【文献】

- ・ヘルマン プラウト(2006)『日本語読本』森岡 健二(訳), 大空社
- ・志村哲也(2006)「ヘルマン・プラウト『日本語読本』」『上智大学ドイツ文学論集』43,
- ・Übungs- und Lesebuch zum Studium der japanischen Schrift, G. Reimer, 1904 (Lehrbücher des Seminars für orientalische Sprachen zu Berlin, Band 19)
- ・Lange, Rudolf / Noss, Christopher: A text-book of colloquial Japanese. Based on the Lehrbuch Der Japanischen Umgangssprache by Dr. Rudolf Lange. Tokyo: Methodist Publ. House, 1907.

5) ドイツ人俘虜収容所で作成された日本語学習書

【課題】

日本は、第一次世界大戦に、連合国の一員として参戦し、ドイツのアジアでの拠点、中国山東省の租借地である青島において、日英連合軍としてドイツと戦った。この結果、ドイツ人の捕虜(当時は俘

虜と呼ばれた) 約 4700 人が日本各地に収容されることとなった。捕虜と地元住民、収容所所員らとの間で生まれた交流は、小説や映画の中で紹介されている。収容所では、日本語のクラスや日本語の学習書も作成された。執筆者クルト・マイスナーとは、どのような人物であったか、また、日本語学習書の内容についても調べてまとめよ。

【文献】

- ・桜井隆 (2000) 「クルト・マイスナー-板東俘虜収容所の日本語教師」『日本語教育史論考』木村宗男先生米寿記念論集刊行委員会、凡人社
- ・中里信一 (2007) 「板東人、クルト・マイスナー覚書」『愛知学院大学教養部紀要』 54(4), 37-45, 愛知学院大学
- ・クルト・マイスナー・岩井正弘 (訳・校正) (2013) 『七夕：星祭り』：元ドイツ兵俘虜の日本文化論『愛知淑徳大学論集. 教育学研究科篇』 (3), 1-21, 愛知淑徳大学大学院教育学研究科論集編集委員会

6) 三井高陽の文化事業

【課題】

三井高陽 (1900~1983) は、三井財閥の資金をもとに、ヨーロッパの日本理解のために、日本語・日本研究を目的とした数々の寄付を行い、当地の関係者の間ではバロン三井の名で知られる。ヨーロッパの水上交通について論文をまとめ、ヨーロッパに長期滞在し、当地のアジア観、日本観を感じ取った彼は、日本政府の対欧文化事業について危惧を懐き、寄付活動を行った。三井高陽の文化事業に対する考え、彼の実施した事業とその評価について調べ、文化事業に対する自らの考えをまとめよう。

【文献】

- ・近藤 正憲 (1998) 「三井高陽の対東欧文化事業：ハンガリーのケースを中心に」『千葉大学社会文化科学研究』2, 千葉大学
- ・三井高陽 (1940) 「国際文化事業への提唱」『中央公論』3月号
- ・三井高陽 (1940) 「日洪文化交流の現状」『新しき盟邦ハンガリー』日本文化中央連盟

7) 漢字の学習方法

【課題】

日本語は、表記体系が複雑なことから、かつて宣教師から布教をさまたげる「悪魔の言語」と称されたこともあった。現在でも、非漢字圏の学習者にとって、習得に時間がかかる言語の一つとされている。しかし、現在ほど学習環境の整っていなかった幕末に来日した西洋人の中には、読み書き能力を十分に身に付けた者もいた。書物を読み、文章をつづる必要のあった西洋人たちは、漢字学習にどのようなとりくんだのだろうか。イギリスの外国官オールコックの文字学習に関する考え方、ロシア正教の宣教師ニコライ・カサートキンらの学習方法についてまとめよ

【文献】

- ・小川誉子美 (2014) 「漢字知識の活かし方—草創期来日外国人の漢字使用—」『総合学会誌』13号, 日本総合学会
- ・熊沢精次 (1980) 「欧米人の日本文字観—キリシタンからチェンバレンまで」『日本語と日本語教育』

(9), 慶応義塾大学国際センター

8) 早稲田国際学院

【課題】

20世紀のはじめ、清国からの留学生が増大すると、各大学が清国留学生部を開設し、日本語教育を始め予科を設けた。中でも、早稲田大学は多くの留学生を受け入れた。しかし、まもなく、留学生が途絶え、1921年には閉鎖された。1930年代になると、ハワイやアメリカ、ブラジルからの日系2世が日本留学を目指すようになった。このとき、早稲田国際学院を開設し彼らを受け入れた。清国留学生部、早稲田国際学院ではどのような教育が行われていたのだろうか。

【文献】

- ・孫倩(2013)「早稲田大学における清国人留学生」『ソシオサイエンス』19, 早稲田大学大学院社会科学部研究科
- ・山下草園(1935)『日系市民の日本留学事情』 文成社
- ・吉岡英幸(1994)「早稲田大学清国留学生部—そのカリキュラムと日本語教師—」『講座日本語教育』29, 早稲田大学日本語研究教育センター
- ・吉岡英幸(1998)「早稲田国際学院の日本語教育」早稲田大学日本語研究教育センター紀要 11, 早稲田大学日本語研究教育センター

4. 授業の内容と受講生による授業「総括」

4. 1 授業の内容

筆者は、本テーマに関する授業を、日本語教育専門科目(他大学の学部生、本務校大学院生対象)以外に、全学科目(日本語教育関連科目の受講経験のない本務校の学部生対象)においても担当してきた。本節では、後者の授業に関して報告する。まず、科目名は「国際理解、日本語をめぐる交際交流史」であり、16世紀から現代までの欧米ロシアにおける日本語教育の史的展開をたどるものである。全学(社会学系、理工系、教育学系学部)の1・2年生を中心とし、登録者は例年80~110名である。受講にあたり、受講生は事前にテキストを読み、予習シートを埋め、授業内では受講生同士内容を確認する。教員は、内容の補足や解説とともに、DVDの視聴、内外の日本語教育関係者を招き各地の日本語教育事情に関するミニ講演などを用意する。

ウェブサイトに関しては、初回の授業からレポートのテーマのリソースとして「課題と文献」を紹介し、各授業でも該当する「課題」をとりあげ、レポートのテーマ選択の動機付けを行っている。受講生は、1学期の間に2回、「課題と文献」から各自がテーマを選択し、まとめた内容をグループで発表、そこで得たコメントや質問をもとに修正した内容をレポートとして提出している。なお、2回目のレポート作成では、文献に加え、デジタルアーカイブを閲覧するなど、一次資料に触れることが条件である。

4. 2 授業の内容

本節では、授業内容を受講生が「総括」したものである。授業内容とは、16世紀から1945年までの欧米ロシアの日本語教育の史実に関するもので、現代史へ移行する前に、どのような学びがあったのか確認を目的に行った。この「総括」は、各自が授業支援システムに投稿し、このシステムを

通じて全員が見られるように設定してあり、受講生が投稿内容を相互に共有できる状態となっている。ここでは、すべての「総括」から、特に目立った共通項を三つ取り上げ、各5点ずつ紹介する。なお、下線は該当部分等を示すために筆者が施したものである³。

4. 2. 1 日本語学習の目的に注目したもの

1)

「日本語学習の歴史は様々な時代背景に影響を受け、現在に至っていることが分かった。単純に言語コミュニケーションを図るためだけの言語学習だけでなく、対戦国の情勢を知るため、あるいは貿易のためなど、その目的は様々であった。言語を学習することは様々な意味を持つということを理解することができた。」

2)

「欧米ロシアの日本語学習は、まず第1に、日本との繋がりを各国が欲した結果生まれたものだと思う。例えば、貿易や防衛、通商など様々な目的が存在したが、それらを果たすためには、日本という国、そして日本人を知る必要があった。だからこそ、日本語を学習し始めるということが起こったのだと考えられる。次に、純粋に日本の文化に心を奪われた場合もあると思われる。日本との通商で、日本の作品や本等が海外に渡った。その結果、日本をもっと知りたいという人々が日本語を学び始めたのである。」

3)

「日本語教育は、日本との交友のためや日本文化の理解のためというより、その国の政治的、経済的な思惑があって行われたということが読み取れた。今となっては、日本の文化は世界で認められ、それを感じようと日本語を学ぶ人や日本に留学しようとする人もいるが、当時の日本の立ち位置や、欧米ロシアが世界を取ろうとしていたために日本語教育もそのための手段であったと考えられる。」

4)

「欧米、ロシアでは、様々な目的や時代背景によって日本語を学習する必要に迫られ、様々な人々が日本語を学習してきた。ヨーロッパでは、宣教師たちがキリスト教を日本に布教するために、まず日本語を学んで現地の人と良好な関係を築こうとした。アメリカは日本と外交関係をもつために、英語を知らない日本人を日本語教師にし日本の学識、文化を取り入れようとした。ロシアは東方進出のための使節団の日本との交渉の際に、日本語教育を実施し、日本の情報を取り入れようとした。アメリカは戦争中、日本人捕虜から情報を聞き出すため日系アメリカ人などの人々に日本語や英語学ばせた。このように、世界の国々が日本語教育に力を入れたのは、宗教、経済や国力、戦争のためであり、日本語はそれらをうまく運ぶための手段として、重要視されたのである。」

5)

「日本語学習という観点でこれまで様々な国を比較してその違いを学んできた。国によって最も違いが大きく出たのは日本語学習を始める動機ではないかと思う。中世のヨーロッパであればキリスト教の布教のため、開国時には日本と貿易等の関係を持つため、今回はさらに太平洋戦争後のアメリカとの関係性についても学び、時代の流れを追いながら日本語教育に力を入れる国とそのきっかけの変遷を見てきた。学ぶ方法も様々であり、間に日本と自国以外の第三者となる国の言語を介入させて学ぶ

³ 誤字脱字は訂正したが、内容に関しては手を入れていない。

国や、自国の言語を話せる日本人を雇って教えさせる国、書籍化して学ぼうとする国など時代が流れるごとに学習法にも多様性が見られた。今後は DVD で見た戦後以降の日本語学習についても知識として取り込まれていくだろうから、これまでとの相違点を探しながら授業に臨みたい。」

4. 2. 2 現代の教育制度や自身の語学学習を対照させたもの

1)

「各国における日本語学習の歴史を学んできたが、第一に、各国が日本語の学習を開始する共通の起因は、日本が貿易相手になることや、日露戦争で弱小国にもかかわらずロシアを破ったことによる今後の日本の成長の予想など、やはり日本と関わることを通じた自国の利益の最大化だと考えられる。第二に、学習したどの時代においても、単語・文法・会話の学習が基本であり、やはり語学学習はいつの時代においてもこの3つが重要なのだと感じた。しかし今の日本における語学学習、ことに英語学習においては、自分が在籍していた公立中学・高校だけで考えると、外部発信型の会話に重点を置こうという試行錯誤が散見される中で、いまだ文の読み取りや聴き取りなどの受動的な学習が多かったため、学習方法の転換を図るには、明治初期の英語教育に倣って、文法と会話を日本人・外国人教師に分かれて習うなどの学習体制の全国的な確立が必要だと感じる。また、これまでの学習において、どの時代であっても、日本語を実際に学んできた人々は、時代や置かれた状況は違えど、実際に日本語の辞書などを作ったり、国内はじめての日本語学校における学習体制を整えたりと、初の試みに挑戦しており、そのような挑戦の歴史を学ぶことができ良かったと感じた。彼らのような大きなことは成し遂げられなくとも、恵まれた環境で勉強・できることの稀有さを噛み締めて日々を過ごしたいと思った。」

2)

「学習してきた授業内容を通して、日本語を学習していた国も人も多種多様であり多くの功績があったのだと率直に驚いた。外人が日本語を学習するための環境や、日本人が外国語を学習するための環境も昔でありながらも充実しておりすごいと思った。貿易や布教など、言語を習得する目的はさまざまであったようだが、当時の多くの人の努力が今日の発展してきた世界情勢に少なくとも影響を及ぼしていると私は思う。今の日本は、母国語以外の言語を習得することに、当時の日本語学習者のように食欲に取り組んでもいいのではないか。」

3)

「現在とは違って昔は外国語の辞書すらない状況で圧倒的に勉強するのが難しい中、本当にたくさんの人が教育のために尽力したのだと思うと感慨深い。我々は当たり前のように外国語を学び、面倒だという学生すらいるけれども、それを築き上げたのは語学を学んでほしいと真に願った人たちの力なのだと思い知らされた。この授業は海外の日本語教育について学んでいるけれども、自分としてはそれに加えて現在の自分たちの外国語学習に対する態度への影響がとても大きい。これほどまでに一生懸命外国語を学ぶために努力した人がいるのに、自分がさぼってどうするんだという気になる。努力しようという気になる。本当に考えさせられる授業だ。」

4)

「現在、私たちも外国語（主に英語）を学んでいるが、なぜ学んでいるのかを自分の中でしっかりと理解する必要がある。それは、昔の日本語学習者も考えていたことだと思う。」

5)

「様々な国の日本語教育を学んできて、私は日本人として他国の人々に日本語を教えられるのか、普段から正しい日本語を使えているのか、ということは何度も考えさせられた。日本語を学びたいという姿勢をもっている外国人がいる中、日本人の自分が日本語を正しく理解できていないなんてとても恥ずかしいことである。この講義を受けてから、日本のよさや特徴を発信できるほど、自国のことを知れていない自分に気づくことができた。もっと日本について興味を持って詳しくなり、たくさん
国の人々に伝えて行けるようになりたいと強く思う。」

4. 2. 3 言語や言語学習史を学ぶ意義に注目したもの

1)

「この授業を受ける前までは、単に日本語教育について学ぶだけだと思っていた。しかし、第一章から、通詞と通事の違いや、日本と外国の日本語教育を通じた関係の変化などを詳しく学び、とても教養がついたと感じている。ロシアの漂流民のビデオを見た時には、漂流民たちの激動の人生、それに向き合うロシア人たちの感情などが理解できた。また、中国の大平学校を卒業した方が講演をしてくださったり、アゼルバイジャンと韓国の学生が話をしてくださったりなど、プリントを埋める講義だけでない様々な方法で近代までの日本語教育について学ぶことができた。レポート作成でも、オーロコックとニコライの人生とともに日本での学習について調べたが、日本人、外国人問わず多くの人々の人生が関わって日本語教育が進んできたことが分かった。前半の授業を通して、近代までの日本語教育に非常に多くの人々の人生が傾けられてきたのだということが学べた。後半では、近代から現代にかけての日本語教育について、想像力を持ち、自分の考えをしっかりと持ちながら学んでいきたいと考えている。」

2)

「語学研究の進捗に、歴史的、社会的な背景は切手と切り離せない。ナポレオン一行によるロゼッタストーンの見つけ、日露戦争勝利によるツラニズムの前進等々各種の出来事に関連してその文字、語学の研究が進んでいく。さまざまな地域で、さまざまなきっかけにより少しずつ研究が進んでいる。物事を捉える上で、多種の言語から考えるということはその数だけの概念を手に入れるということになるだろう。おそらく今でも続いている研究の行方をどこにどう繋がっていくのかと楽しみにしている。」

3)

「授業内に鑑賞した「おろしや国酔夢譚」ではラクスマンが、「二つの祖国」では日系二世が言葉を使って、物事を温和に進めていた。外国人という見方で委縮してしまった相手は、話すことを恐れるだろう。しかし、自分の母語が話せるとなれば安心して話せるようになる。相手の使う言語が話せるということは、少なくとも言語獲得のために勉強をしたわけであるから、嫌な気持ちは薄れるのだと思う。また、言語に加えてその国の文化を理解してとなれば、さらに相手は話したいという気持ちになる。言語はただ単に自分の意見を述べるためだけに使われているのではなく、その言語を知っているということ、相手の国に興味があると伝えることもできるのだ。」

4)

「日本という国が世界に広まっていく過程で国内外を問わず多くの人に関わっていたということが分かった。開国後は戦争など、世界の動きによって日本語学習は様々な役割をもつようになった。必ずしも友好的な関係のために使われたわけではないが、少なくともどの時代でも日本という国を知るた

めに必要なものであったと思う。様々な時代の日本語学習を見てきたが言葉を学ぶということは会話や読み書きができるようになるためだけではなく、互いを理解し新しい技術や考えをもたらし発展させることができるものなのだと思います。

5)

「大学に入って初めて、外国の視点から日本を見るということを行なって、新たな日本を見出せることが出来ていると思う。今後国語の教師を目指す上で、学習を続けていきたい。」

5. 結語

前節で紹介した内容は、受講生の「総括」から、特に目立った3つの共通項を選び、該当するものを断片的に紹介したにすぎず、綿密な分析を施し全体像を示そうとするものではない。しかし、一部に、史実から各自のこれまでの経験や知識、感性をもって、独自の視点で史実を掘り下げ、応用しようとする姿勢を見出すことができる。言語学習の歴史（現代史を含む）から何を学び、掘り下げていけるのか、日本語教育関連科目の受講経験のない、また、これまで日本語教育という分野の存在すら知らなかった受講生の学びから、彼等を対象に本テーマ当分野を扱う手法や意義、当分野のさらなる可能性について考えていきたい。

参考文献

小川誉子美（2017）「日本語教育史の意義と可能性：授業実践と研究リソースの構築を踏まえて」『外語专业建设与人文精神培养 2』大连理工大学出版社

立花隆（1995）『ぼくはこんな本を読んできた—立花式読書論、読書術、書齋論』文芸春秋

本研究は、JSPS 科研費（基盤研究（C）平成 24 年度～平成 26 年度、課題番号：24520572、研究代表者：小川誉子美、課題名：日本語教育史のコンテンツの再構成と資料公開に関する基礎的研究）および、（基盤研究（C）平成 28 年度～平成 30 年度、課題番号：16K02806、研究代表者：小川誉子美、課題名：現代日本語教育史研究のための情報リソースの構築—グローバルな視座の育成に向けて）の助成を受けたものである。